

吉田松陰の詩藻

— 和歌・俳句編 —

山中 鉄三

松陰の詩藻を通じて、思想と情緒を見究めるには全十巻の松陰全集に点在する漢詩六七二首、和歌一〇九首（内八首は同趣重復の歌）、俳句六三句を時代順に配列することからはじめねばならない。全集は日記、紀行、書簡などに便宜的にまとめて編集してあるので

その中に散在する詩歌を時代順に正確に配列しなおすことは困難であり不可能な点もあるが、詩と歌と句を

時代順に配列し通し番号と巻数と頁を付記し、索引の便宜をはかり、論述はその番号を示すことにした。六

七十二首の漢詩研究は「吉田松陰の詩藻」（下）として次号論叢にまとめることにしたので併せて参考にしてほしい。

和歌は同趣類歌を時を隔てて別人に認めたり、その際に多少の加筆改作した作品もあるが程度により削除

したり重復と思われるものもあることをお断わりしておく。頁数は大和書房版吉田松陰全集（私達が頭註作業を完成させたもの）に拠った。全集は原文（漢文体のまま）の昭和九年版と読み下し文の昭和十五年版（共に岩波版）と昭和四十七年版の頭註本（大和書房版）と三回上梓されている。

歌と句の傾向をおよそに分類すると、

		歌（一〇九）	句（六三）
自然叙景・風物	七	五七	
自然への抒情	三三	六	
国家・忠孝・信義	四〇	〇	
外夷・時局・思想	五	〇	
挨拶・親愛情	二四	〇	

松陰の歌と句 目次

()の数字は歌及び句の通番号

松陰の和歌

嘉永五年(一八五二) 23歳……………(三)

(九卷東北遊日記) (1)

嘉永六年(一八五三) 24歳……………(三)

(七卷書簡) (2) (3)

安政元年(一八五四) 25歳……………(四)

(九卷回顧録) (4)、(七卷書簡) (5)~(7)、(六卷

松陰詩稿) (18)~(24)

安政二年(一八五五) 26歳……………(六)

(六卷松陰詩稿) (25) (26)、(七卷書簡) (27)、(六卷詩

文拾遺) (28)~(30)、(二卷賞月雜草) (31) (32)、(二卷

獄中俳諧) (33)、(二卷冤魂慰草) (34)

安政三年・四年 無し

安政五年(一八五八) 29歳……………(八)

(四卷戊午幽室文稿) (35)

安政六年(一八五九) 30歳……………(九)

二

(五卷己未文稿) (36)~(35)、(六卷詩文拾遺) (56)~
(58)、(八卷書簡) (59) (60)、(九卷東行前日記) (61)~
(73)、(六卷涙松集) (74)~(93)、(八卷書簡) (94)~(101)
(六卷留魂録) (102)~(109)、(六卷詩文拾遺) (107)~(109)

松陰の俳句

安政元年(一八五四) 25歳……………(10)

(六卷松陰詩稿) (1)

安政二年(一八五五) 26歳……………(11)

(七卷書簡) (2) (3)、(二卷賞月雜草) (4)~(11)、

(二卷獄中俳諧) (12)~(54)、(二卷冤魂慰草) (55)~
(58)

安政三年(一八五六) 27歳……………(12)

(七卷書簡) (59) (60)

安政四年 無し

安政五年(一八五八) 29歳……………(13)

(四卷戊午幽室文稿) (61)、(六卷詩文拾遺) (62)、

(九卷東行前日記) (63)

松陰の和歌

嘉永五年（壬子）一八五二 23歳

(1) 明日もまた櫻かざして遊ば（誤カビ）なむ今年ばかりの春と思へば

（九卷東北遊日記・二六〇頁）松陰は文飾の文章家や詩人の才のないことを自認し経国済世の思想、尊皇攘夷の時務論や行動者を自認していたことは漢詩にも明白に表出しているが、反面また詩人的風雅にもあてがれていたことも初期の漢詩（特に十代から二十代の初頭）に明らかである。松陰はその矛盾の中に時に右し時に左する有様であり、絶望の時（獄囚の時など）は詩人的稟質がにわかに蘇ってくるのは右の矛盾的両端を身に存していたからである。東北亡命は表向きは江幡五郎の仇討ち助けとだが経国済民を背景にした北陸政治経済の探訪研究が目的であったことはまぢがない。決して文学するためではなかった。この歌は漢詩と併記していて、「棄^レ絶^ル文章^ニ已^ニ幾^ニ春^ニ」とあるのは美文を書く文章家になることを棄絶していた

心であるが「昨夜松州^{ツツ}誤^ル観^ル月^ル」、松島の月を誤って見て、にわか詩人の心となったと風雅に興じている自分を見出でて歌を作り、桜をかざして遊びたいと思ったのである。松陰の矛盾的二重層の世界を垣間みる歌である。

嘉永六年（癸丑）一八五三 24歳

(2) 亜墨奴^{アメリカ}が欧羅を約し来るとも備のあらば何か恐れん
(3) 備とは艦と砲との謂^いならず吾が敷州^{しきしま}の大和魂

（七巻書簡集二〇九頁）共に兄梅太郎へ示したものの。松陰の歌には純粹な文学的短歌はすくない、多くは思想伝達か、意志提示か、教訓、自警のもので、このことは漢詩も同様である。ただ漢詩は和歌にくらべて純粹詩が若干みられるのは中国の漢詩の影響とみるべきだろう。和歌は、当時の国学や儒学者の作で文学的な和歌はほとんどなく目に触れることも不可能に近かったことが原因していたものと思われる。国防と攘夷の思想を表面に出し、アメリカがヨーロッパと組んで来寇しても大和魂があれば恐れないという、短絡的な思想であることは否めない。

安政元年（甲寅）一八五四年 25歳

(4)世の人はよしあしごとくもいはばいへ賤が誠は神ぞ知るらん

（九巻回顧録三九六頁）下田踏海失敗の時に下田で詠んだ作。国禁を犯して国外に出ることを松陰は最後まで悪い事と思っていない。国禁は徳川三百年の法で私は日本三千年の法で考えていると兄への書簡に書いている。たとえ世間の人が「悪しごと」と言っても神は照覧あることだと、信念を述べたもの。

(5)とくかへりたけき教を弘めて給へ広き大和に誰れかあるらん
（五月二十一日）

(6)すめかみのみことかしこみ身の上はなりゆくまにまかせこそすれ

（七巻書簡集二二二頁）共に宮部鼎蔵への作で下田踏海（三月二十八日）後の江戸獄（四月十五日入牢）から送ったもの。熊本藩の宮部鼎蔵は終生の友で東北亡命にも同行、のち京都池田屋で新撰組に殺された。武教を弘めて攘夷国防を果たすのは君だと激励した心である。(6)は作品としてもできた秀作。識得した澄ん

四

だ心境である。松陰はこれ以後は獄か幽室かの生涯を終るが、獄という環境を嫌悪することはなく「福堂」と考え大いに勉強する場として最大限に活用しほとんどの著作は獄幽室の間に成ったものである。獄は松陰にとって「別荘」でもあった。

(7)秋風に手折りし園の草花をつぼみながらに散るぞ悲しき
（七月十日）

(8)一度はさかせて見たき蓮花^{はす}手折りし人のあだ心かな
（七巻二二二頁）知己の土屋蕭海へ「瓶花を惜しみて」の心を江戸獄から送る。松陰の歌には珍しく自然愛情の秀作の歌である。

(9)起きふしに故郷おもふ吾がこころ文みる人は知るや
知らずや
（八月二日）

(10)ふらばふれよものきばは雨しづく月見ぬをりにすむ身なりせば
（九月二日）

(11)月を見ばさこそころのあくがれめなさけありけり
うきぐものそら

(9)は七巻二三八頁、(10)(11)は二四五頁）江戸獄から小倉健作（松島剛蔵、小田村伊之助）松陰妹寿の婿

（のち楯取素彦）と三人兄弟の末弟）へ届けた「中秋無月」としての作で、自然詠である。(10)の下旬は「牢に住む身であるから」の意と思われ「せば」の仮定条件は語法的には誤。(11)は美しい月をもし見るならば志士の思いを忘れて風雅に興ずるかもしれない、雲が月をかくすのでそのおそれもない。雲はなさけがあるよ、の意で松陰に多い二重層の矛盾性を反影したものでこの精神過程は詩にも多い。

(12)たらちねのたまふその名はあだならず千世万世へと

めよその名を

(十二月三日)

(七巻書簡集二八七頁)江戸獄から萩野山獄に移送(十月二十四日)され妹千代(児玉祐之妻)へ萬吉出生を祝つての作、松陰の妹たちへの書簡は戦前に教科書に用いられる程の立派な文で今でも女子教育に必読の価値をもつ。名を後世に留めるほどの人になれと祈りをこめて祝い激励したもの。以下野山獄。

(13)——(4)と同じ。

(十二月八日)

(14)かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれ

ぬ大和魂

(七巻書簡集二九五頁)下田獄から江戸獄へ移送の

途次、泉岳寺前を通り四十七士のやむにやまれぬ忠義心を思いなぞらえて、下田踏海は国への忠義心からだと、その大和魂を兄梅太郎(松陰の獄中生活の勉強や著作に必要な書物や資料提供は梅太郎の尽力による)へ野山獄から届けたもの。松陰の大和魂の根幹は忠と孝であり、兵学の論理とからませて忠と孝の松陰独特の解釈は文や詩や歌に多く残されている。

(15)八潮路をたやすくわたるもろこしの海の城てふなく

てやまめや

(十二月十八日)

(七巻書簡集三〇六頁)宛先の玉木文之進は叔父としての保護指導だけでなく村塾(文之進主宰)の門下生として松陰に絶対的な影響を与えた。文之進は松陰に対しスパルタ式英才教育を与えただけでなく最後(前原一誠の乱の時)は松陰思想体系に殉死した趣がある。右の歌は外夷の軍艦をないものにして終りたい、という攘夷の心である。

(16)文うつす硯の水解けにけり梅なき家も春は立ちぬる

(十二月二十四日)

(17)大ぞらの恵はいとど遍ねけり人屋の窓も照らす日の

影

(七巻書簡集三〇九頁)兄梅太郎への歌。獄での写本

もスムーズに進み野山獄にも立春の米た挨拶であり、

松陰の平和さが窺える。(17)は君寵が獄の私にもあまね

くとどく平和を感謝している心。松陰は牢生活で自由

に勉強でき夜は明りも提供され衣食も無料であること

を感謝した文を残している。

(18)ものおもひ筑紫の道のいながきみじかきふみにい

かでつきなむ

(野山獄中)

(19)ものおもひつきずばつきそつきずともおもふこころ

はしる人ぞ知る

(六巻松陰詩稿四四頁)友人林藤橋(筑前の隠士)の

「言を尽すは尺牘に非ず」の詩文を受けての返歌で、

(18)思いを尽して道を語りつくすことは短い手紙にはで

きない。と掛詞(尽すと筑紫)を用いての技巧歌。松

陰は古歌もかなり見ていることは(18)の「硯の水」など

でも領ける。(19)思いは書き尽してなくても真の知己の

心は理解できる。の意。「つきそ」は「な尽きそ」の略。

六

(20)——(15)と同じ。(叔父玉木文之進宛、略)

(21)旭あまひさす軒端の雪も消えにけりわが故郷の梅やさくら

ん (兄梅太郎宛)

(22)まどかにと祝ひ初めにし鏡餅君が心を照らしてぞ見

る (母方の叔母宛)

(23)——(17)と同じ(兄宛、略)七巻松陰詩稿

(24)——(16)と同じ。(兄宛、略)共に四五頁。

(六巻詩稿四四、五頁)松陰の詩にも梅が多く、松

と共に節操の高く固い比喩に用いているがこの歌は素

直に家の梅花を立春に偲んだものである。(22)鏡餅を貰

ったお礼。鏡餅の鏡の縁語を用いて、叔母の尊い心を

照らしてみると言い、古歌の技法を心得た歌である。

安政二年(乙卯)一八五五年 26歳

(25)浦山うらやまし心の儘に踏み行かん春の東の山の霞を

一月十日

(26)今日よりぞ幼心を打ち捨てて人と成りにし道を踏め

かし 一月十一日

(六巻松陰詩稿六八頁)親戚の藩医岡田以伯の相模

成菅に東上するのを野山獄から送る歌。(26)は同じく七

○頁。叔父玉木文之進の嗣子彦介の元服に正しい道を踏み行けと激励した歌で共に挨拶をふくめた作品といえる。

(27) — (25)と同じ。(野山獄より兄梅太郎宛、略)

(28) 清らかな夏木のかげにやすらへど人ぞいふらん花に迷ふと

(29) 懸香のかをほらひたき我れもかなとはれてはぢる軒の風蘭

(30) 一筋に風の中行く螢かなほのかに薫る池の荷の葉はす

(六卷松陰詩稿三四八頁) 野山獄でのクラブ活動で

同囚の吉村善作を俳句の先生として押し立ててその作品集を松陰は「賞月雅草」「獄中俳譜」と題して書き残した。富永有隣、河野数馬など多くの俳句、和歌、漢詩をみるが、その中に身持ちの悪い未亡人高須久子が親の依頼により野山獄に入れられ俳句をたしなんでいた。松陰の獄中講話「孟子」などを聞き並々ならぬ人物に敬慕を寄せ、松陰も彼女の心に和歌をもって答えた。松陰の生涯で具体的な女性性は彼女一人であって、小説や映画で「ほのかな恋」といった形で取扱われる

所以である。俳句は彼女の方が松陰よりはるかに勝っていることを松陰は知ることか、和歌で答えるのを常とした。松陰はそんな心やすさから平戸・長崎遊学、東北亡命、下田踏海など過去の行跡を彼女に物語った。彼女は十二歳の年上であったことも、ある甘えと安らぎが松陰の心を許したものであろう。「高須未亡人に数々のいさをしをものがたりし跡にて」と前書している。(28)は、そうした松陰の心やすさから彼女と親しく話し心安らぐのを人は美しい未亡人に心迷うていると見るのではないかと、ふと心をよぎる思いを歌にしたものである。(29)(30)は「未亡人の贈られし発句の脇とて」と前書してあるが、その発句はわからないが、安政二年十二月十五日免獄杉家幽室への別れのとき、女久子として「鴨立ってあと淋しさの夜明かな」と松陰に贈った句がありこれは明らかに女としての久子の淋しさを伝えている、そういった心に答えての歌である。懸けた香かを彼女にたぐえて、香の匂いが身に絡みついたおもい、それを払いのけねばならない、払いたい私、そんな迷妄かを問われてみれば、その香はただ清

く匂う軒の風蘭の放つ匂いではないか、と自分の迷妄を恥じる思いを歌にしたもので、曲折した心象詠である。

(80)は、池に薫る蓮を彼女にたぐえている。その美しい蓮の香の中を私は風と共に去る螢であると詠んでいる。おさえた相聞の歌といえる。二首、松陰のすぐれた短歌である。

(81)ゆくりなき雲の立まひかくろひて今宵の月を見てや止む哉

(82)明月のはれ着と芋も薄絹を着ては座敷へ打ちころびけり

(二卷賞月雑草一八七頁) (81)は仲秋無月と題し、月を見ないで終ることよの意。(82)は仲秋と題した瓢一房(松陰の戲号)の俳諧歌。剽げたもので松陰には謹厳陋固なものの外にユーモラスで酒脱な一面が書簡などに応々みられるが詩歌にもその片鱗がうかがえる。ゆでた月見料理の里芋が座敷にころがっているという意味で、縁語を駆使した技巧の歌である。里芋の皮を薄絹(きぬめかずきとも云う)と表現しそれを明月をみる

晴着と見立てて、そんな芋のころんだ姿を詠んだものである。

(83)暁あけぼののささ鳴き高し冬の梅・起きて手洗ふ水あけ潤るたに潤

(二卷獄中俳諧二一三頁) 防府天満宮奉納の短歌形式であるが単連歌の心組みで作ったものに見える。神官の鈴木高輅は歌人で古学者、松陰の歌に添削をしたほどの人で、そんな関係から届けたものであろう。

(84)箱根山けはしき道を越す時は過ぎにし友のなほ思はれん ※この歌の作歌年次は(89)参照。

(二卷冤魂慰草二五九頁) 下田踏海に行を共にし萩獄で死んだ金子重輔を悼み全国の詩歌人に弔詩を求め二年がかりで完成した詩歌集に、安政六年五月二十一日に、江戸護送の時に重輔を偲ぶ歌として詠んだものを附録として加えたもの。松陰は重輔のために募建立にまで力を尽し執念のような友情を示した。

安政五年(戊午) 一八五八年 29歳

(85)歳月は齡と共にすた頽れども頽れぬものは大和魂

(四卷戊午幽室文稿四九四頁) 除夜の感懐で漢詩と

併記してあって、大和魂とは忠孝の二字に関わる内容である。吾生^レ於^ニ國^ニ不^レ忠^ニ臣^ノ又^レ是^レ囹圄^ニ違^ニ親^ニ云々。また、君恩重^ニ於^ニ獄^ニ凶報定^{メテ}何^レ辰^{トキ}云々の絶句の一聯をみても忠と孝の実をあげえない無念さ、そして益々の意欲を燃やしている心である。

安政六年(己未) 一八五九年 30歳

(86) 若芽刈る磯の蟹^{あまびと}人事問はむ異なる国の春や如何にと
(87) 九重の悩む御心思ほへば手にとる屠蘇も呑み得ざるなり

(88) 事しあらば君の都に詣づべし今朝聴くかけに声劣らめや

(五卷己未文稿一二三―一二六頁) 元且詠で漢詩と併記してある。歌だけ見ると平凡だが漢詩の心と併せると自ら別の感懐が湧く。

(89) の詩に「太陽朝^ニ上海^ノ東^ノ戎狄蛮夷淑氣同^シ」とある。「太陽は朝、日本の春の東の海に上る、夷狄(外国の蔑称)も春の温和な気は同じ」という心で、さて海人に外国の春の気はどうであるかと問うてみたいの意。松陰の心の奥には、日本のすばらしい

春と同じものが外国にあるかと疑っている気分がある。

(89) の詩に日米修好通商条約(安政五年)は違勅であることを幕府は畏れ慎しむことはない、それを思うと「儻^{たう}生^{せい}草^{そう}莽^{ぼう}臣^{しん}多^た罪^{ざい}」と述べ、草莽の臣は正月とはいえ屠蘇を心楽しくのむことはできないと歌ったもので時局を非常に深く胸に受けとめていることが察せられる。

(88) の詩に「寤^ご寐^び猶^{なほ}迷^ま皇^{わう}帝^{てい}邦^{ほう}聽^き得^と三^{さん}元^{げん}鷄^き一^{いつ}唱^{てう}」とある。獄中に寐ても醒めても日本の前途を憂い、この元朝、暁を告げる鷄鳴を聞いたというのであるが松陰は国の危機の警鐘と聞いた筈である。今の危機は鷄鳴以上のものがある。松陰はいつでも天皇の膝下に馳せ参ずるという意である。詩の結に「勤王今日孰^{たれ}無^な双^{じゆう}」と結んでいる。松陰は無双の忠、功を果たしたのである。松陰の逸る心を見る。

(89) 花や鳥今を盛りの春の野に遊ばで猶ほもいつか待つべき

(89) に次ぎ一二八頁。上句は「愛^せ錢^{せん}惜^せ命^{めい}世^せ皆^け

是^レ」の意味を表象し、時局を忘れ浮薄な俗世に身を遊ばせず、攘夷の旗上げの機はいつかと時を待つべきだという意味。下句は漢詩で「天子仁明、悔^ニ墨夷^一」時乎^カ今去^{ラバ}復^{マタ}何時^シ」とあって待つべき時とは攘夷の時である。

(40) 唐国に宮仕へする臣達は君のなき世も蔽^{わらひ}とるかも

(39) に次いで一三〇頁。中国の伯夷・叔齊は主君に忠諫を述べ聞き入れられず首陽山に薇を食って餓死し節義を守った故事をふまえて、「西山空臥^{シテ}采^ニ其^レ薇^一」と述べ、松陰は餓死することなく命の限り君臣の義を完うするの決意を述べ「神国^ノ君臣^ノ殊^ニ異^ニ域^一」の心を歌った。

(41) 古き書読めば種々^{ふみ}思ふなりかからん時に吾れ生ればや

(42) 共に一三一頁。獄中にして「世^ニ嘗^テ吾^レ已^ニ尽^{シテ}無^シ余^ト」(世間的な生活は既に私に営むことは許されない)「存^ニ何^カ臭^ク味^ヲ読^ム旧^ニ書^一」(何の趣味でシナの歴史的故事を読むのか)松陰にとって、シナの忠臣義士が節を守って死んだあの生きざましか選ぶ道は

ない、あのような時に生れかわりたい、という心である。

(42) 岩間なる梢の雪は融^とけぬなり心して吹け春の山風

「平生酷愛^ス愚公^ノ愚^ク今日還^{また}為^ル伏^檻」

駒^ト「思想と行動へ烈しく燃やす闘志に松陰は再入獄、閉じ込められた馬ではないか。シナの愚公(列子)に出典)の愚(土を運び山を移す愚)ではないか。然し焦

っても成功するものではない。「寄^ス語^ヲ東^ノ風^ニ無^ナレ

漫^ラ促^ニ」東風よみだりに春を促すな、とじっと堪え

る心を歌にして蹉^ニ跎^ノの相次ぐ獄中の思いを自ら慰籍し

たもの。その蹉^ニ跎^ノとは前年の安政五年の、水野土佐守

暗殺策(九月)伏見獄雲浜脱獄策(十月)間部老中要

撃策(十一月)大原三位西下策(十二月)の画策があ

り十二月二十六日再入獄となったものだが更に水戸密

使画策、清末藩支配策に次ぎ安政六年一月は藩公伏見

要策を計画しその過激さに対する時機尚早論が門弟

間にも出て離反絶交という孤絶の運命が生じた。

(43) 小夜更けて共に語らん友もなし窓に薫^{かほ}れる月の梅が

香

次の(44)と共に一三五頁。松陰の死生悟入、死の幹旋、諫死論、自然説、草莽崛起論などの死の哲学が育まれてゆく頃に当る。「夢魂全駭、陰魂迷」志の理想的展開は夢となり詩魂も湧くことはない、友も来ない、というのが獄窓の月と梅をみて知る実感であったと思われる。「中宵起、孰聽荒雞」(晋の祖逖が荒鷄を聞いて決然奮起した故事) ああこの国難に誰が奮起するのかと、絶望的な思いをやつての歌と知らねばならない。

(44) 心なき春の寒さの烈しきに柳の色も萌え出ざるなり
春になつても緑のいのちを芽吹かない。これは春の景色でなく「斯生只合、終斯境」と獄中の無念さを暗示したものである。

(45) いましめの人屋は今日も人ぞ来ぬ猶ほ人の日と人や
いふらむ

一月七日を人日じんじつというのに人は獄屋を尋ねて来る人がいない。なぜ人日じんじつというのか。しかし牢獄にあって「自怪余情及三野梅」と詩情までも捨てようとはしない松陰である。

(46) 人間はぬ人屋ひとやも春は問ひにけり窓の日影に梅の香ぞ
する

門弟の離反などへの激怒(絶食、縊死なども試みたほど)もすぐに解けて多くの詔書が届けられるのだが「特許陳編、静処親」(獄舎に自由に古書の読めること)松陰は読書で心の乾きを癒し獄窓の梅に親しむのであった。

(47) かしこくも千世に芽出たき大君に賤が摘み得し芹捧
げばや

同じく五卷己未文稿(以下(45)まで)一四二頁。

「此時無三路策、殊勲」とシナ堯舜の君を連想し我は大君に報恩の殊勲を示したいという心である。芹を捧ぐの語は「呂氏春秋」の「野人芹をうましとし至尊に献ぜん云々」を引いたものである。

(48) 大江なる川の御裔みすえはいと長し君が浮舟載せてこそ行
け

(49) 色かへぬ松にひとしき人なれば末頼もしき恋もこそ
すれ

(共に前書一四二頁) 毛利藩は大江氏の子孫「西土

門望独、吾藩」とその家柄と人望を松陰は榮譽と
 考え「此間寧負至尊恩」と報恩することを誇
 りとしていた。いつまでも共に毛利藩に尽したい心で
 ある。大江の「江」の縁語の、川、長し、舟、載せを
 用いた歌。(49)の松は、色を変えず守節の意。村塾の友
 はいつか見事な功の花を咲かすだろうの意で「恋もこ
 そすれ」の表現は松陰には珍しい。

(60) 驚も問ひ来ぬ里の梅の雪積みてこそ知れ花の操を

(一四五頁) 玉木文之進、兄梅太郎、門弟に与えた

もので、梅は松と同様に節義を守る意に用い、苦患の
 中にも必ず忠義の花をみせる心を伝えたもの。

(61) 大丈夫の死ぬべき時に死にもせで猶は蒼天に何と答
 へん

(一四六頁) 「死已無名生亦懶 英雄有」

恨訴蒼天」死は功をなすためにあり死が無名な
 らば死の価値はない、無価値な死のために生きている
 ことのもの憂さ、この悲しみを何と天に訴えたらよい
 か。つまり生も死も無駄になろうとする恨みの心であ
 る。

(62) 春風に嶺の白雪吹き消せど心に積もる憂さは消えぬ

や

(一四六頁) 詩に「志士積憂誰得消」、志

士が忠をなそうにも成し得ない獄中の苦しみを消すこ
 とは出来ない。忠とは「春海如油鯨鰐驕」と
 あるから外夷来寇という困難に処すべき忠であること
 は明らか。

(63) 世の人は吾れを目くらと云はばいへ海互り来るへび

すにおぢず

(一四八頁) 盲蛇に怖じずの諺を踏まえ、蛇と夷を
 通わした歌。詩には「狂暫」とあるが松陰の思想行動
 の一途さを「狂」と自他共に許した事實は、松陰の「

狂夫の言」という論文でも明らかである。

(64) 思ふかな又思ふかな心ある人の心を吾が心もて

(一七五頁)

「諸友の書具さに心赤を見はす唯だ桂

生の戒めを守る」と兄に書を送りこの歌を添えている
 ところから桂小五郎の言に対し「吾れをして諸友と絶
 たしむ今謹んで其の言を奉ぜり」(入江子遠につぐ)
 などからみて松陰は桂の深憂をわが心として認めよう

とした歌と思われる。村田蔵六（大村益次郎）もこの日萩に来たニュースを記録している。

(55) 君こそは神の御心慰めて栄ある名をも世々に伝へん
 (二〇四頁) 公卿大原三位を西に迎え尊皇攘夷の旗を上げようとした松陰の画策（大原西下策）は失敗したが大原三位が松陰へ「七生滅賊」の七字を揮毫し、

松陰は「君こそ神の御心」と感激、「田竜一挙を謀らん」と決意した、その心を詠んだものである。

(56) 独寝の首を挙げて窓みれば花の月影直千金
ひとりねのこうべ

（六巻詩文拾遺三六六頁）安政六年二月十九日野山獄より子遠（入江九一）に与えた文に添えた歌で「春宵一刻直千金」（蘇軾の「春夜」）を歌にして伏見要

駕策（藩公参勤東上を伏見で阻止する松陰の一世一代の画策）の十五日前の明鏡止水の境地ともいえる。

(57) 我れひとり醒めたる人の心しは昔も今も床しかりける
ゆか
 （木々大人へ）

（同、三七二頁）佳節の時も酒屋の前を通らない禁酒ぶりの、その節を守ることの固さに屈原（節を守り汨羅に入水したシナンの故事）を連想してその固節を奥

ゆかしと歌った作。木々大人とは誰か不明、大人と松陰がいう人は林真人（兵学の師）の子寿之進か林藤橘（筑前の隠士で月性と深い人）か。樹々亭（杉一家）か。

(58) 箱根山越すとき汗の出でやせん君を思ひて引き清めん
 てん

（同、三七二頁）安政六年五月二十五日の江戸護送の出発の前（命令を受けたのは十四日）に未亡人高須久子（同囚）から饑別の手拭を受けた返し。あなたを思い出しながら汗を拭きましようと思ひ、同時に俳句「一声をいかで忘れん郭公」とも贈っている。彼女との関係は(58)(59)の歌と併せ参考のこと。

(59) —(45)と同じ。兄宛書簡にさし入れ依頼（櫛、元結の挨拶。（八巻一八二頁）

(60) 力なし才なし智なし学もなし心もないが死にたくもなし
けれどもさすがに

（八巻書簡集三二六頁）五月以前、作間（寺島）忠三郎の右の歌を添削したものでその理由に「心と志は遂になしとは言ふべからず」と述べて右側に細字で書

き加えている。

⑥1 かけまくも君の国だに安からば身を捨てるこそ賤しが

ほいなり

⑥2 五月雨の曇りに身をば埋むとも君の御ひかり月と晴

れてよ

⑥3 今更に言の葉草もなかりけり五月雨晴るる時をこそ

待て

(九卷東行前日記一八二頁) 江戸護送の命を受け出

発前日(五月二十四日)までの二十一日間の日記で歌

は巻頭に載せた序歌である。忠義のためなら「ソクラ

テスの毒杯と知っても」飲むのだという松陰の覚悟の

歌。⑥1日本の安全の為ならば死も臣の本意である。⑥2

わが身は死んでも大君の栄光は輝いてほしい(「てよ」

は助動詞「つ」の命令形で強意の希求)

⑥3今更にも言わぬ、幕府に正義を開陳し忠諫するた

めの江戸行きの日を待つのみ、の意。

⑥4いはずとも君のみは知る吾が心の限り筆も尽さじ

(同、五四六頁野村和作||後の野村靖子爵宛、五月

十六日)この日、松浦松洞画く松陰像に有名な自賛

詩「三分ツ出ル盧ヲ 諸葛ヤシメルカナ 已ハ矣夫 …… 至ニ誠シテ

不レ動ハ兮カ 自レ古リ 未ダ三レ有レ二ラ」を自署し各方面に詩や

歌を送った。和作は入江九一(久坂玄瑞と共に禁門の

変で戦死)の弟で最後まで松陰に尽した人物である。

松陰の弟子を信じた心。

⑥5今更に驚くべくもあらぬなり兼て待ち来し此の度の

旅

(同、五四六頁佐々木叔母||父百合之助の妹宛、五

月十七日)覚悟していた心を伝えた歌。

⑥6心あれや人の母たる人達よかからん事は武士ものの常ふ

(同、五四七頁諸妹宛、十七日)この日、自賛の詩

の跋文「…諸友此れに對せば宜しく隔世の想を為す

べし吾れもし市に磔せらるとも此の幅すなわ乃ち生色あら

ん」と死の覚悟を書き残している。妹達へ松陰死後の

指箴を示す歌。

⑥7郭ほとこ公と今まを限りと鳴出とも君より見れば未だにやあら

ん

(同、五四八頁木木氏宛、十八日)木木氏は⑦参照

ここは同囚林有道か。私が正義開陳を尽しても君から

見れば不十分なことであろうか。

(68) 鳴かずては誰れか知らなむ郭公まがたれ 皇月雨みづ くらく降りつづく夜は

(同、五四九頁) 宛名はないが同じ東行前日記五七三頁にこの歌を兄梅太郎長女に与え、また八巻書簡集三五三頁には赤川淡水にも送っている。(67)と同じ発想で、暗黒の今日わたしが正義を開陳しなくては誰がその所在を知ることができようか、の意。「知らなむ」は「知りなむ」の誤と思われる。この日、品川弥二郎小田村伊之助の子(久米次郎)、入江九一(杉藏、子遠とも称す)、口羽徳祐へは詩を送っている。

(69) — (64)と同じ(冤魂慰草二五九頁、略)

(同、五六〇頁) 下田踏海の同行者金子重輔の獄病死は松陰の生涯の痛恨事であった。

(70) 賤が身は世には合はねど大空をてりゆく日やは照さぬくらめや

(同、冷泉雅次郎||天野徳民宛、二十一日) 松陰の思想行動は世に受け入れられず「狂」といわれ蹉跎の連続であるが、天はいつか照覧されるだろう、の意。

この日、国司仙吉、岡田耕作に激励の詩を、木木主人に覚悟の詩を送っている。(木木氏は(67)参考)

(71) 栖すみ馴なれて人屋ひとやも流石床ますがゆかしけり別れに絞る五月雨のす 袖

(同、五六八頁、同囚宛二十四日) 松陰は獄屋ひとやで孟子を講じ共に歌や句や詩や書道を楽しんだ。それをなつかしみ別れの涙を流すことよ、と詠んだのである。

この日前田孫右衛門(藩主の信頼厚く、要職にあり松陰を理解し松陰の間部老中要撃策をも是認し、のち禁門の変敗退、野山獄で恭順派の手に斬首)、飯田吉次郎、獄吏福川犀之助などに詩を送る。明けて二十五日江戸へ護送されたのである。

(72) (同、五七三頁) 「諸妹より心得にもなるべきことを授けよとの事なれば云々」とある。結句「武士の常」が「武士の習ぞ」と改む。(66)と同歌(略)

(73) (同、五七三頁) 「こたび東へめし人にして送らるるよしをききて」とある。(68)と同歌(略)

(74) 帰らじと思ひさだめし旅なればひとしほぬる涙松かな (涙松・五月二十五日)

(六卷涙松集、二八一頁。⑧まで日付と地名を追うて江戸までの歌) 江戸護送歌日記である。涙松は旧山口街道の萩の出口にある大谷の松で今も現存。覚悟の旅立ちの歌である。現地に歌碑として残る。

(75) 思ふかな君がつくしのころしは賤があづまの旅につけても (防府菅公廟・二十六日)

菅原道真が心を尽して九州に旅立った思いを今の松陰の境遇に合わせて思う歌。尽くしと築紫は掛詞。

(76) 君こそは蛙鳴く音も聞きわかん公のためにかおのがためにか (鈴木大人に・同日)

鈴木高輅は直通の子、父子共に古学者歌人で防府天満宮神官。高輅編「玉石集」は全国歌人集である。松陰も歌の指導を受けていた。玉と石を見分けられるだけでなく蛙の声の良悪を聞き分けることのできる人というのは歌を見分ける人だと賞揚したものと思われる。玉石集は松陰も見ていた筈である。此集の竟宴の高輅の歌は「石をさへ玉のたぐひにまじへしは時代の光りをたのむなりけり」である。

(77) ふりつづく五月雨晴るるころはまた人なやまする暑

さなりけり (五月雨止む・同日)

(78) とらはれて行く身も君の恵なりむくひでいかにわれおくべきや (二十七日)

右は同行三十名の中に医師を加えた藩主への感謝と報恩の心を歌ったもの。現地に歌碑として残る。

(79) 取りあへぬ今日の別れぞさちなりきものをもいはば思ひをぞまさん (呼坂に・同日)

熊毛町呼坂に「陰ながら見送る」人は寺島忠三郎で彼の歌に返した歌。二人の歌碑が現存。言葉も交わせない別れが却って幸せで、ものを言えば涙で言葉にもならないだろう、の意。

(80) 夢路にもかへらぬ関を打ち越えて今をかぎりと渡る小瀬川 (小瀬川・二十八日)

(81) 安芸の国昔ながらの山川にはづかしからぬますらをの旅 (芸州路・二十九日)

(82) そのかみのいつきの島のいさをしを思へば今も涙こぼるる (厳島・同日)

いさをしとは毛利元就が陶晴賢を討ったこと、この護送檻輿の旅は漢詩でも綴られていて(縛吾集)六卷

二五一頁に同趣の詩がある。(80)の歌碑現存。

(83)世の中に思ひのあらぬ身ながらもなほ見まほしき広

島の城

(広島にて・同日)

(84)郭公はとこまれになり行く夕ぐれに雨ならなくば聞かざら

ましを

(備前路・六月五日)

「雨ならなくば」(雨でないならば)とあるので雨

中郭公を聞いた歌と理解される。

(85)今の世は君の誘子ぞいとおほみたふれきたためてくし

のみをとり

(吉備宮・同日)

不分明な歌だが、「君の誘子」は吉備津彦の鬼退治

の話を頭に浮かべ、当世は鬼が多いので頑迷な奴らを

こらしめるため祈って籤だけを取ったことだ、ぐらい

に解しておく。因みに去来の句碑「秋風や鬼とりひし

ぐ吉備の山」がある。

(86)別れてはふたび淡路島ぞとは知らでや人のあだに

過ぐらん

(淡路島・六月八日)

別れたら再び逢うことはない、そんな思いを思わし

める美しい島を人はどうして見過すのだろうか。「淡」

に「逢」を掛けた歌。

(87)とどまりて月をみるべき身なりせばなほあはれあら

んあかし浦波

(明石・同日)

美しい明石の浦に留まって(護送の身ではなく)見

ることが出来たなら夜を明かし一層と満足の趣もある

だろう、の意。明石と夜をあかしと掛詞。

(88)一谷打死うちじとげしますらを起して旅の道づれにせん

(一谷・六月九日)

義経に攻められて死んだ武士を思い、且つは死を賭

け江戸下向する松陰の決意を示す歌。

(89)かしこくも公きみの御夢にいりにしを思へば今は死せざ

らめやは

(湊川・同日)

松陰の楠公への傾倒は東上のたびに時には拓本を求

め時に詩文に書き残している。今回も詩に(六卷二五

八頁縛吾集)「楠墓を過ぎて」と触れている。今こそ

死ぬ時だと覚悟の歌である。

(90)こととはん淀の水車昔よりいく廻りして世をばへに

きや

(淀・六月十一日)

幾廻りして時を経た水車だろうと水車に感を寄せ、

縛吾集二五九頁には漢詩で同日に男山・淀堤・無題

(珍しく淀の渡しの橋本の遊女の事に触れている)の三編を残している。

⑨1 見ずしらぬ昔の人の恋しきと思さん^{おぼ}ことのかしこかりける (伏見より都を拝す)

上句不分明だが、尊皇攘夷の正義を開陳して死んだ見ず知らずの松陰という男を、天皇は思われるだろうと、想像した歌と思われる。

⑨2 帰るさに雁の初音を聞き得なば吾が音づれと思ひそめてよ (護送と人と別る・品川)

五月二十四日、一ヶ月で江戸に着き、雁の音を聞いたら私の心情を伝える声と聞いてほしい、と感謝の気持である。金川(神奈川)や品川その他多くの詠史など道中は歌より漢詩の方が多し(縛吾集参照)

⑨3 待ち得たる秋のけしきを今ぞとて勇ましく鳴くつわ虫かな (幕府に召されて)

はじめて幕吏の取り調べに毛利藩邸から七月九日に出向く時、正義の論を吐くべく「死と志を賭けて」意気軒昂に決意を述べたもの。「勇ましく」に覚悟のほどがひびく。

⑨4 打ちつづく小春のけふぞ時雨るるは打たれし人を嘆く涙か

⑨5 終^{つい}にゆく死出の旅路^{いであち}の出立はかからんことぞ世の鏡なる

⑨6 国のため打たれし人の名は永く後の世までも談^{かた}り伝へん

(八巻書簡集四〇五頁堀江克之助宛、安政六年十月八日)ハリスを江戸城で要撃せんと謀った同囚水戸義士堀江は藤田東湖・武田耕雲齋の弟子で松陰は刑死前にわかeni親しみ書簡を多く渡している。右の三首は三士(橋本左内・頼三樹三郎・飯泉喜内)を悼んだ歌である。この三首は同日、高杉晋作・飯田正伯・尾寺新之丞の江戸在住の同志にも届けている。

⑨7 皇神^{すめみかみ}の誓ひおきたる国なれば正しき道のいかで絶ゆべき

⑨8 道守る人も時には埋^うもれども道^{みち}し絶えねばあらはれもせぬ

(同、四〇九頁、堀江宛)趣旨は書簡前文の「神勅(天照神勅)日嗣^{ひつぎ}の隆^{かさか}えまさんこと天壤と窮まりな

るべし）相違なければ日本は未だ亡びず、日本未だ亡びざれば正気重ねて発生の時は必ずあるなり」とあるが、その心を歌にしたものである。（十月十一日）
 ㉑ やよやまてと云ふにいとまもなかりけり君が出でゆくよべの別れは

（同、四一〇頁、小林民部宛、十月十二日）同囚京都の志士小林は公卿の門に出入し橋本左内らと議し水戸密使と謀り入獄同居中であつたが「昨夜は存外に御移獄只々当惑仕り候」と松陰は別れを惜んだ歌。その時に松陰は「旦那にも至極御残念に思はれ候即ち御怨みの一句」として同室のボス（名主代）沼崎吉五郎の歌も同封した。沼崎は松陰の獄中講話に感服し弟子格として松陰の遺書留魂録を預り持ち遠島中も離さず、のち神奈川県令の野村靖（入江九一の弟野村和作）に持参した人物である。

㉒ 冬よるひとりまくらのさむからぬまたあけきぬかきくもかなしき

（同、四一六頁、堀達之助宛、十月十七日）堀は長崎の人で通訳。米艦渡来に活躍中独断の事に触れて入

獄し松陰と同囚（のち蕃書調所教授となる）、松陰は書簡に堀先生と署名して後の事を依頼し、この歌と詩二篇を届けている。「あけきぬ」は不分明。あげぎぬ（秋になり獄衣を一枚ふやす）の意味か。

㉓ 親思ふところにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらん
 （萩の松陰神社の歌碑）

（同、四一八頁、父・叔父・兄宛、十月二十日）有名な最後の書簡で前文に「平生の学問浅薄にして至誠天地を感格すること出来申さず、非常の変に立到り申し候。嗚々御愁傷も遊ばさるべく拝察仕り候」として右の歌があり、萩松陰神社に歌碑となっている。後文に「幕府正義は丸に御取用ひ之れなく、夷狄は縦横自在に御府内に跋扈致し候へども神国未だ地に墜ち申さず、上に聖天子あり下に忠魂義魄充々致し候……」「私首は江戸に葬り家祭には私平生用ひ候硯と去年十一月六日呈上仕り候書とを神主と成され候様頼み奉り候」とあり現在松陰神社に硯と書が神霊となっている。㉔ 心なることの種々かき置きぬ思ひ残せることなかりけり

004 呼びだしの声まつ外に今の世に待つべき事のなかりけるかな

へよ

004 討たれたる吾れをあはれと見ん人は君を崇めて夷^{よす}払
005 愚かなる吾れをも友とめづ人はわが友とめでよ人々
006 七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はんころ吾れ忘
れめや

(六巻留魂録二九五頁、十月二十六日黄昏) 右五首は留魂録の終りに「かきつけ終りて後」として記載、004 全てを書き残したという安心立命の境。005 判決を待つだけだという静晏の境。006 「我れを哀しむは我れを知るに如かず。我れを知るは吾が志を張りて之れを大にするに如かざるなり」(「諸友に語る書」)の心境。007 同志の栄光を念ずる心。008 大原三位卿に書いて戴いた「七生滅賊」の心を忘れない幽鬼の境。「二十日黄昏書す二十一回猛士」の日付文字が印象的、二十七日に処刑されたのである。

009 骨を粉にし身を碎きつつ大君に丹^{あか}き心を捧げてしがな

004 此の程に思ひ定めし出立^{いでたち}はけふきくこそ嬉しかりける

和魂

009 身はたてひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大
(六巻詩文拾遺三三七頁) 009 年月不明。天皇に赤心を捧げたい心。004 「十月二十七日呼出しの声をききて」とあり絶筆である。評定所で判決を受けこの日、伝馬獄内の刑場で斬首された。005 有名な最後の歌。処刑寸前に松陰の口吟したものを幕吏が筆録したものの。留魂録の冒頭にもおかれている。この辞世の歌と共に辞世の詩が残された。「吾今為^レ国^ノ死^ス死^{シテ}不^レ負^カ君親^ニ悠々天地事鑑照在^ニ明神^ニ」

松陰の句

安政元年(甲寅) 一八五四年 25歳

(1) いとつむぐ音しづまりてきりぎりす

(六巻松陰詩稿一四七頁) 漢詩にこの句を添えた句で「俗客由来少^シ不平^ニ」と結び武士の者に却

て不平の多いことを歎き誠めたもの。中村道太宛。

安政二年（乙卯） 一八五五年 26歳

- (2) ささ鳴の声聞かまほし小春かな
- (3) 小春日にさくを待つなり帰り花

（七卷書簡集四〇一頁、妹千代宛十一月六日、於野山獄）妹千代は松陰門下児玉祐之の妻。母が柿九年母を獄に届けたその文に小春の文字があり俳句趣味を感じ礼を兼ねて作ったもの。時務論も経世済民も尊皇攘夷もなく温和な作。およそ時務論や思想的なものは詩に最も多く激しく、和歌はそれに次ぎ句はほとんどおだやかな叙景が多い。「ささ鳴といふは鶯の冬なくこと、帰り花は桜桃などの花冬さくをいふ」と松陰は註をつけている。

- (4) 名月に香は珍らしき木の子かな 一八六頁
- (5) 名月や木の葉にたるる玉の露 一八八頁
- (6) 治まれる世にも鎧の威しかへ 一九一頁
- (7) 今度来た和尚の談義珍らしい 〃
- (8) 八景の屏風の絵図は古めかし 一九二頁
- (9) 近頃は何処も芝居の流行もの 一九二頁

(10) 淀川の夜舟の窓に月の影

一九三頁

（二卷賞月雑草、於野山獄）(6)以下は連歌でやや俳諧的な趣味のものが多く。獄中で詩・歌・書などの交歓も松陰の幹旋で行われた。

- (11) 秋かとのぞげば梅雨の晴間哉 (夏)[★]
- (12) 螢火や草露しげき谷の間 (夏)
- (13) 辨当の匂ひに競ふや田植かな (夏)
- (14) 田の面に吹く風あをし五月晴 (夏)
- (15) 皁月（雨）に翹湿ふ燕かな (夏)
- (16) 淋しさの一しほまさる雨蛙 (夏)
- (17) 葉柳や池にさし出た涼み棚 (夏)
- (18) 葛水や柳の陰の懸り舟 (夏)
- (19) 鶯や昔ながらの春景色 (春)
- (20) 夕涼み月にすかして笛の声 (夏)
- (21) 花の山日暮忘れて樽の酒 (春)
- (22) 雪の藪見習れぬ村の飯煙 (冬)
- (23) 雪の朝隣の近き山家かな (冬)
- (24) のうぜんや旅人休む松の下 (夏)
- (25) 涼しみの秋は是れなり桐一葉 (秋)

- (27) 森の小未風も動かぬ雲の峰 (夏)
 (28) 旅の夜の燈火消えてきりぎりす (秋)
 (29) 朝貌やほうきめの有る庭の砂 (秋)
 (30) 朝貌や手水を遣って窓の先 (秋)
 (31) やれ窓に寝ながら見るや盆の月 (秋)
 (32) 魂送る芋がらの舟や暁の風 (秋)
 (33) 柴の戸を開けばどこも月白し (秋)
 (34) 黍の穂やいづくも同じ秋の風 (秋)
- (二巻獄中俳諧一九九頁) (35) 葛水は葛湯を冷した飲料水。懸り舟は岸にとめてある舟。(36) 手水は洗顔や手洗いの金盥などの水。(37) やれ窓は破れた窓。(38) 芋がらの舟は芋の皮をはいだ茎で作った舟、ここは秋の沖の相島に來た異国船をさす。わかりやすい温和な句である。
- (39) 夜の深けて芭蕉の声や秋の雨 (秋)
 これは箒めの庭という席題で、松陰と淡い慕情を歌や句で交流した未亡人同囚の高須久子も第二句の脇に座を設けていてかなりの実力者であったことを示している。短歌行として連歌形式も吉村善作(同囚で号は

- 花酒屋)を師にして開いている。五七五(句形式)の上の句の松陰作品に、(二巻獄中俳諧)
 (35) 交易の繁昌をする米相場 二〇三頁
 (36) 太平の恵のとどく有難さ
 また、初句に例えば「あれあれに」と示しあとに付句をする遊びもあって、松陰は次の作を残している。
 (二〇二頁)
 (37) 八あれあれに帆かけて沖を航る黒船
 次の作は連歌形式「短歌行」の作で、
 (38) 都には近頃あちな流行事 二〇七頁
 (39) 人情は兎角田舎が律義にて 二〇八頁
 (40) 花は今盛りと誰も喜びて
 右は九月朔日の座である。次の(41)(42)は久子(楓する中にも朱の鳥井哉)と並んでいる。
 (41) 朝霧や見習れぬ島の五つ六つ 二〇九頁
 連歌形式の座の七七(下の句)は句ではないが九月十六日の座は七七の付句ばかりであるのでそれも松陰の例句として示すと、

(一——) 何心なく鳥の来て鳴く 二〇九頁

- (1) 小半分酒に酔うてあたたか 二〇九頁
- (2) 風呂の煙の藪ごしに立つ 〃
- (3) 短冊にかく夕部の読歌 〃
- (4) 凧はからずも木の葉を散らす秋の風 二一一頁
- 九月二十九日の「短歌行」の付句に、
- (5) 夕立晴れて跡の涼しさ 二一二頁
- (6) 春長々と鶯の歌 〃
- (7) 掛物の絵図は古風な狩野の筆 二二三頁
- 防府天満宮奉納に松陰が一人で発句を作り付句をつけた連歌は短歌の形式なので別の松陰歌集(8)に記した。
- (8) 清らかに卓つくえの塵をはきのけて 二二四頁
- 十月十二日芭蕉翁忌も連歌形式なので五七五の句形の作のみを次に示すと、
- (9) 此の頃は別わかれて肴も安いことなり 二二七頁
- (10) 追はぎの出るは昔の事にして 〃
- (11) 夕鳶たづなに明日の日和の愛合はれ 二二八頁
- (12) 戦の昔話も勇ましく 二二〇頁
- (13) わんわんと闇夜いぬに狗いぬの声計ばかり 二二〇頁
- (14) 紅葉もみぢちる錦にしきを拾ひろふ翁おきなの忌 二二二頁
- (15) 翁忌おきなや香かぐをりを慕ねがふ残り菊 〃
- (16) 麦むぎ時ときを半途たんどちでやめる時雨ときぞめ哉 二二二頁
- 次の安政二年秋短歌行は久子と組んだ連歌形式で、二人のものを示すと、(二二二頁)
- 月に催もよほすうどん新蕎麦そば
- (17) 武士の心勇むさします轡虫わらむし 松陰
- 新蕎麦の美味に武士が出陣前がちゃちゃと勇ましく食うさまに付けたもの。これに更に松陰が自分でつけた付句に、
- (18) いくくを見ても秋の淋しみしさ
- これは前句の轡虫の鳴く景色に受けたもの。松陰が一人で短歌形式に上句と下句を詠んだものが混って、短歌の部に入れるべきであったが次にあげておく。天の岩戸の鶏とりを連想れんそうした作。
- 告つたげ互あひるかけの八声やこえに久堅ひまかたの
- 天の戸とらあけて春は来きにけり
- (19) 酒さけと茶ちやに徒然つれづれしのお草くさの庵いほ 松陰
- 谷やの流ながの水みづの清きよらか 久子

松陰が草庵に酒と茶の隠棲のさまを句にすれば久子は草庵に谷水を配したわけである。更に自ら次の句をつけ、松陰はそれに応じた。

四方山に友よぶ鳥も花に酔ひ

久子

蝶と連れ行く春の野遊

松陰

二人は呼吸を合わせて一首の歌を完成している。春の野に二人の映像が浮かぶ。松陰が免獄され杉家幽囚になり安政二年十二月十五日に送別句会を催し、それには久子が初句に、

鴨立ってあと淋しさの夜明かな

と詠んで松陰との別れを悲しんだ。安政五年十二月に松陰は再入獄して再び久子と句と歌の交流がはじまっている。前後するが安政二年一月に下田踏海の同志金子重輔が岩倉獄（松陰の野山獄と道を隔てて前にある。下級の獄）で死去、松陰は友の死を悲しみ冤魂慰草（追悼詩歌集）を編集すべく安政二年五月から四年夏にかけて全国の有志詩人に呼びかけ二年を要して完成した。次の作は獄囚徒と獄吏の追悼句集の中の作である。序に久子の作も、

わか木さへ枝をれにけり春の雪

久子

(55) ちるとても香は留めたり園の梅

松陰

(二巻冤魂慰草二四九頁) 更に長文の序を書き連歌

の座も催した(二五一頁)。

(56) 入相にむかしを偲ぶ寒さかな

松陰

折りて手向くる早咲の梅

松陰

初句も付句も松陰だから短歌形式であるが俳句の部に入れておく。

(57) 味ひも宇治の新茶は格別に

二五二頁

(58) 拝領というて伝はる陣羽織

二五三頁

序に久子の句に「落葉ちる淋しき路の思ひ哉」がある。

安政三年(丙辰) 一八五六年 27歳

(59) 千里経て香なり届けや菊の花

(60) 酒は御園に均し野辺の菊

(七巻書簡集四五三頁黙霖宛、於幽囚室) 畏敬する

僧黙霖へ友情を伝え毛利藩と天皇との歴史的関わりを述べ「鄙藩主人、天朝を尊奉する微衷は斯くの如し。

其の事ならざるは僕輩臣民の罪なり」云々と松陰の基

本的信念を書いて九月朔日と結んだあとの句であるから菊の香は松陰の真情を意味したもの。「香なり」はせめて香なりとも、の意。(60)の句には「僕の手栽なり天公の雨露を受けて発ひらくもの」と詞書がある。

安政五年（戊午）一八五八年 29歳

(61)燈火の影静かなり歳の暮

（四卷戊午幽室文稿四九四頁）再投獄は「學術不純にして人心を動揺せしむ」罪である。その経緯と鬱憤を十二月三十日「投獄紀事」として完成。除夕（除夜）として詩と歌と右の句を記す。詩に「君恩重シ於獄コ」と、歌に「頽れぬものは大和魂」（和歌の(62)）と、並列される「影静かなり」の句とはおのずから文学の発想形式の違いを見ることができらる。

安政六年（甲寅）一八五九年 30歳

(62)一声をいかでか忘れんほととぎす

（六卷詩文拾遺三七三頁）五月十四日江戸護送の命を受け二十五日に萩を出発する。その間、高須久子は最後の別れを野山獄で松陰に汗ふきの手拭を贈り、それに答えた(63)の歌と並べて、「高須うしに申上ぐると

て」と前書して贈った句である。尊皇攘夷の志士松陰のせい一杯の思いをこめた情感を感じる。あなたの声を忘れることはないと押えた松陰のこえが聞こえる。(63)別れかな入合いりあひ早し梅雨のそら

（九卷東行前日記五八六頁）江戸護送前の身のまわりの処理、書き残すべきものは全て書き留めた五月十四日から二十二日までの最後の詩文の中の、二十四日「同囚に別る」の句であって歌（(71)の歌）と並べて松陰の最後の句となっている。安心と諦感がつたわる。

以上、歌と句に、激しい思想詠は少く抒情叙景が多いのは詩形の齎すなりゆきであるが、それとても感情や意志を象的に伝えるものが多い。そして実用的挨拶詠の多いのは漢詩と同様であった。